

ゴジャール・ワヒー語の能格構文¹⁾

吉枝 聡子

はじめに

1. 名詞・代名詞変化
 2. 動詞語尾
 3. ゴジャール・ワヒー語の能格構文
 4. 能格性のゆれ
- 結びにかえて

はじめに

パミール諸語²⁾は伝統的に中期イラン語の流れを継承し、現在時制では主格対格構文、過去時制で能格構文をとる、いわゆる分裂能格をもつとされる。パミール諸語の能格構文については Payne(1980,1989)などの報告があり、一部のパミール系言語が有する'double oblique'による能格構文は、類型論的にも特異な例としてたびたび言及されてきた(Dixon1994: 94 ほか)。

Payne は自身のパミール諸語に関する一連の研究において、ワヒー語³⁾については、旧ソ連側(タジク共和国 Khorog 周辺)に分布する、タジク・ワヒー語に関する Grünberg & Steblin-Kamensky(1976,1988),Pahalina(1975)らの報告をもとに言及している。これによれば、タジク・ワヒー語は、一部の方言では 1・2 人称に斜格と主格が混乱する形で能格性を残すものの、すでに主格対格構文に移行している。タジク・ワヒー語における能格構文から主格構文への移行は、地域の優勢言語であり、タジキスタン共和国の公用語であるタジク語(ペルシア語)の影響を強く受けたためと考えられる。ペルシア語は、中期イラン語の段階で能格構文から主格対格構文に移行し、現在では格の別をもたない。

一方で、その地理的条件などから近年まで比較的孤立した環境にあったゴジャール・ワヒー語は、タジク・ワヒー語に比べてペルシア語の影響が少なく、文法・語彙の両面でタジク・ワヒー語より古形を保ち、現在もなお能格構文をとどめている。その形態は S(自動詞主語)、A(他動詞主語)、P(他動詞目的語)がそれぞれ異なる格で表される、イラン語派や能格研究の視点から見てかなり例外的なものであるが、実際の会話においては、多くの変異形がみられ、能格構文にゆらぎが生じている状況を垣間見ることができる。

本稿では、このようなゴジャール・ワヒー語の能格構文について、その基本構造と、実際の使用環境で認められる多様性の現状について概観し、能格構文に起こりつつある変化の流れについて考察する。

1. 名詞・代名詞変化

ゴジャール・ワヒー語の名詞変化において、主格対格構文および能格構文に関係する格は、主格と、本稿で便宜上斜格と呼ぶ格⁹⁾である。斜格には斜格 I (-e 語尾形)、斜格 II (無語尾形) の 2 パターンが認められる。なお、ゴジャール・ワヒー語にはこれ以外に、属格、与格、奪格、呼格の別がある。

名詞・代名詞の主格、斜格 I/II の一覧は以下の通りである。

代名詞	主格		斜格 I		斜格 II		
	単数	複数	単数	複数	単数	複数	
1	wuz	sak	maže	sake	maž	sak	
2	tu	sašt	towe	save	tow	sav	
3	I ⁹⁾ yem	yemišt	yeme	yemve	yem	yemev~yemv	
	II yet	yetišt	yete	yetve	yet	yetev~yetv	
	III yow	yašt	yowe	yave	yow	yav	
普通名詞	-	-išt	不定	-e/-	-eve/-ve	-	-ev
			定	-e	-eve/-ve	-	-ev

主格は、現在時制における主語および過去時制における自動詞の主語(S)、斜格 I は現在時制における直接目的語および過去時制における他動詞の動作主(A)、斜格 II は過去時制の他動詞における被動作主(P)を表す。

ここで斜格を名称として用いることについて若干ふれておきたい。斜格は本来、直格に相対する格の総称を示すものであり、他の格の別があるゴジャール・ワヒー語の格組織において、この名称を使用することは、必ずしも適当とはいえない¹⁰⁾。一方で、ここで斜格 I としている格は、能格構文における論理主語を表す専用の格ではなく、主格構文をとる現在時制では対格的機能も果たすため、これを能格と呼ぶにも疑問が残る。しかしながら、直角-斜格の二格対立が中心的であった中期イラン語の格組織から見れば、例えば上 1 人称単数主格 wuz と斜格 I/II maže/maž は、それぞれ本来の直格系、斜格系に起源をもつことは明らかであり (cf. 中期ペルシア語 人称代名詞 1 人称単数直格 an, az 斜格 man¹¹⁾), パミール諸語の他の言語でも、直格-

斜格の対立による格組織が中心である。このため、ここでは暫定的に、主格に対立するこれらの 2 つの格を、斜格 I/II と呼んでおく。

ゴジャール・ワヒー語の斜格には、上記のように、語尾-e を伴う形 (斜格 I) と、無語尾形 (斜格 II) の 2 パターンが認められる⁸⁾。この形は、単一の斜格をもつタジク・ワヒー語や他のパミール諸語からみて例外的である。ただし、一部のパミール系言語では、代名詞の直格/斜格は、全く異系統とみられる形が二項対立を示すのに対し、ゴジャール・ワヒー語の主格/斜格は、上の一覧表から明らかなように、1 人称単数以外は、主格/斜格はほぼ同一の語に付加する接辞によって区別されており、特に 1 人称複数形と 3 人称単数形では、主格と斜格 II は同形となる。ちなみに、ゴジャール・ワヒー語の 3 人称の主格および斜格に見られる yem/et/yow は、他のパミール諸語の格組織において主格系統に相当する形である [cf. Roshani グループ 代名詞 3 人称単数形男性 直格 I yim II yid III ya 斜格 I may II day III way (Payne 1980)]。

2. 動詞人称語尾

ゴジャール・ワヒー語の動詞人称語尾は以下の通りである。なおこの語尾は、現在語幹に接続して現在形を形成するのみで、過去時制および完了形には用いられない。

	単数	複数
1	-em ⁹⁾	-en
2	-	-it ¹⁰⁾
3	-t / -it ¹¹⁾ / -d	-en

3. ゴジャール・ワヒー語の能格構文¹²⁾

他動詞文は、現在時制で主格対格構文、過去時制で能格構文が共存した、いわゆる分裂能格をもつ。過去時制では、動作主は斜格 I、被動作主は斜格 II に立ち、動詞には動詞人称語尾のつかない過去語幹が用いられる。

以下に、現在時制および過去時制の例をあげる。グロス中では主格を nom, 斜格 I/II をそれぞれ obl-1, obl-2 と略す。

3.1. 現在時制

他動詞の主語は主格、目的語は斜格 I に立ち、動詞は主語に一致した動詞人称語尾をともなう。

1) wuδq wuzeş rahime winem 「私は今日ラヒームに会う」

[wuδq 「今日」 wuzeş wuz 「私」 1sg nom + 継続を表す接尾辞-eş rahime 「ラヒーム (人名)』

obl-1 winem: win- 「見る, 会う」 1sg pres]

- 2) yoweš draxtve dišt 「彼は木 (複数) を切っている」

[yoweš: yow 「彼」¹³⁾-eš draxtve: draxt 「木」 pl obl-1 dišt: din- 「切る」 3 sg pres]

3.2. 過去時制

3.2.1. 自動詞

主語には主格が立ち, 動詞は主語に対応する Moving Particle (→4.2.) と過去語幹+e によって表される。

- 3) wuzem ra sisuni reŷide 「私はシスーニーに行った」

[wuzem: wuz 「私」 nom + Moving Particle 1sg ra 「~に」 reŷide: reč- 「行く」 過去語幹-e]

- 4) yašteve kutan wezde 「彼らは全員来た」

[yašteve: yašt 代名詞 3pl (III) nom + -ev Moving Particle 3pl kutan 「全員」 wezde: wez- 「来る」 過去語幹]

3.2.2. 他動詞

他動詞の過去時制および完了形では, 動作主は斜格 I, 被動作主は斜格 II に立ち, 動詞は人称語尾をとまなわない過去語幹 (完了形では完了語幹) が用いられる。

- 5) yezi maže rahim wind 「私は昨日ラヒームに会った」

[yezi 「昨日」 maže: 「私」 obl-1 rahim 「ラヒーム (人名)」 obl-2 wind: win- 「見る, 会う」 過去語幹]

- 6) rahime maž wind 「ラヒームは私に会った」

[rahime 「ラヒーム (人名)」 obl-1 maž: 「私」 obl-2]

- 7) yowe draxteve dišt 「彼は木を切った」

[yowe: 「彼」 3sg(III) obl-1 draxteve: draxt 「木」 pl obl-2 dišt: din- 「切る」 過去語幹]

- 8) žu nane mažer luqpar gošt 「私の母親は私に服を作ってくれた」

[žu: 「私」 属格 nane: nan 「母親」 obl-1 mažer 「私」 与格 luqpar 「服」 sg obl-2 gošt: go- 「作る」 過去語幹]

- 9) yowe yar det yi botale tel¹⁴⁾ 「彼女 (母親) は彼女 (娘) に一瓶の油を渡した」

[yowe: 「彼女」 3sg(III) obl-1 yar: 代名詞 (定) 3sg 与格 det: rand- 「与える」 過去語幹 yi 「一つの」 botale: botal 「瓶」 属格 tel: 「油」 sg obl-2]

- 10) sakeš čoy pit 「私たちはお茶を飲んでいて」

[sakeš: sak 「私たち」 obl-1 + -š (進行を表す接尾辞・短縮形) čoy: 「茶」 sg obl-2 pit: pev-

「飲む」過去語幹]

11) *maže xalg wotsn liker* 「私は人間であることをやめた」(現在完了形)

[*maže* 「私」obl-1 *xalg wotsn* 「人間であること」不定詞 obl-2 *liker* : *letser*- 「やめる」完了語幹]

なお、タジク・ワヒー語では、現在／過去時制、自動詞文／他動詞文の間で構造上の差はない。主語は常に直格、目的語は斜格で表される。

cf. *wuz* (nom) *tawi* (obl) *winəm-aš* (1sg pres) 「私は君に会う」

wuz (nom) *tawi* (obl) *windəm* (1sg past) 「私は君に会った」

ただし、一部の方言では、本来の斜格が動作主を表し、主格として機能する現象も認められる。

cf. *maž* (obl=nom) *režd(-əy)* (1 sg past) 「私は行った」

maž (obl=nom) *taw-ey* (2sg acc) *wind* (1 sg past) 「私は君を見た」

(Payne1980)

3.3. ゴジャール・ワヒー語の格標示タイプと能格性

一般的な能格構文(能格-絶対格型)は、他動詞の動作主は能格またはそれに代わる有標格、被動作主は絶対格などの無標格で標示され、動詞は被動作主に一致すると説明される。

ゴジャール・ワヒー語では、上記のように、過去時制および完了形では、動作主(A)が斜格 I、被動作主(P)が斜格 II の異なる格で標示され、過去時制において P が主格をとることはない¹⁵⁾。また、過去時制および完了形では、動詞は無語尾の過去語幹または完了語幹が用いられるため、動詞人称語尾と文法的主語の照応が行われず、能格構文と判断する基準からはやや外れている。しかしながら、自動詞と他動詞の間で論理主語の標示形態が異なること、また A が主格に立たず、斜格 I/II がともに主格に対立する体系を成す点を考慮すれば、能格性をもつ構文の一種と解釈して差し支えないであろう。

A と P が異なる格で標示される過去時制と、主格対格構文を現在時制に併せ持つため、S,A,P が異なる格で標示される、ゴジャール・ワヒー語のこのような格標示体系は、類型論的にみて、興味深いタイプといえることができる。Comrie(1981)は、自動詞文の主語(S)、他動詞文の動作主(A)、被動作主(P)の3要素を標示する格の対応関係から、格標示の体系を 1)S=A, P (主格-対格型) 2)S=P, A (能格-絶対格型) 3) S=A=P 型(無語尾形など)、4)3 項型 (S,A,P が異なった格で標示される)、5)P=A, S 型の5タイプに分類し、4)、5)は極めてまれなタイプであるとする。ゴジャール・ワヒー語の格標示は、このうちタイプ 4)(S≠A≠P)あるいは 5)に準ずるタイプに属すると考えられる。ちなみに、Payne(1980)がパミール諸語(Roshani グループ)について指

摘する格標示タイプは、A と P が共に単一の斜格で標示され S(=直格)に対立する *double oblique* (上記 5)タイプ) である。Payne は、Roshani 語に認められる *double oblique* について、本来は、最も一般的な能格－絶対格型(A=斜格、P=直格)を有していた"Proto-Pamir Languages"が、古代イラン語期の格構造(主格－対格型)の対格から影響を受けた結果、現在のような S, A=P=斜格のタイプ 5)に移行したと考察する。ゴジャール・ワヒー語にみられる $S \neq A \neq P$ の格標示型は、この A=P=斜格のタイプが、さらに何らかの理由で A と P が区別されるようになり、別の格で表されるようになった変化パターンと解釈することも可能である。

上述のように、タジク・ワヒー語は、一部の方言で 1,2 人称に能格性をわずかにとどめる以外は、主格－対格型に既に移行している。文字をもたないパミール諸語には書記テキストが存在しないため、タジク・ワヒー語に生じた能格－直格型→主格－対格型への移行段階を通時的に追うことはできない。同様に、ゴジャール・ワヒー語の斜格が 2 パターンに至ったという仮説を実証することもまた不可能で、やはり推測の域を出ない。しかしながら、タジク・ワヒー語に、主格と斜格の差異がもっとも大きい 1 人称 (*wuz* vs. *maže*) に限定的に残存する能格性は、タジク・ワヒー語における主格対格構文への移行の、最終段階を示しているということもまた可能である。加えて、ゴジャール／タジク・ワヒー語における代名詞 3 人称単数主格／斜格に認められる語形上の単純化 (cf. Roshani グループ 1 代名詞 3sg m 直格 I *yim* II *yid* III *ya* 斜格 I *may* II *day* III *way* vs. ワヒー語 主格 I *yem* II *yet* III *yow* 斜格 I/II *yeme/yem* II *yete/yet* III *yowe/yow*) は、パミール諸語において、ワヒー語が格標示の点で最も革新的であることを示している。格標示の機能からみて極めて非効率的な上記 4), 5) のタイプが、「古い能格・絶対格型の格標示体系が崩壊して、主格・対格型へ移行する段階を示している」(Comrie 1981) と指摘されるように、ゴジャール・ワヒー語に見られる現在の格標示体系は、他のパミール系言語の格標示が示す移行段階がさらに進んだタイプと捉えることもでき、ゴジャール・ワヒー語もまた、中期イラン語の一部の言語やタジク・ワヒー語のように、本来の格標示が主格－対格型へと移行する新たな段階にある可能性を示唆しているとも、十分考えられるのである。

4. 能格性のゆれ

このことを示すように、現在のゴジャール・ワヒー語における能格構文の実際の使用状況を見ると、3. で例示した「正しい」能格構文にも様々なバリエーションがあり、能格性に一種の「ゆれ」が存在する現状を見て取ることができる。

このバリエーションは、1) 斜格語尾の不安定さによる斜格 I/II の混乱、2) いわゆる *Moving Particles* を用いた短縮形が示す論理焦点の変化、の 2 点において現れる。

4.1. 斜格に見られるバリエーション

斜格 I/II は、現在のところ、インフォーマント調査などで「正しい」文を提示する場面において、使い分けが混乱することはめったにない。規範文法のレベルでは、斜格 I/II は異なる格として認識されており、S=主格、A=斜格 I、P=斜格 II という格標示はなお安定しているといつてよい。しかしながら、実際の会話レベルになると、これらの格に混乱がみられ、能格構造が崩れて曖昧性が生じ、聞き直したり言い換えたりするといった代替法がとられることがたびたびある¹⁶⁾。

こうした斜格の混乱は、斜格 I (語尾形) における-e の脱落、斜格 II (無語尾形) への余剰な-e の付加、の両面で認められる。

4.1.1. 斜格 I における格語尾-e の脱落

本来-e 語尾をもつ斜格 I (語尾形) は、実際の会話において、語尾が弱化して/a/となったり、脱落することがある。

12) yezi maž zav wind 「私は昨日子供達を見た」(cf. yezi maže zav wind)

() 内は、本来の語尾つき斜格 I を用いた基本的な形である。一方、12)は、斜格 I の 1 人称単数 maže の語尾が脱落した形 maž が用いられている。

類似の現象は、他の人称および普通名詞の全般にわたって看取できる。

13) yezi šač maž qap dišt 「昨日犬が私を噛んだ」

[yezi 「昨日」 šač 「犬」 maž 「私」 obl-2 qap dišt : qap di- 「噛む」 過去語幹]

šač には、語尾がついた斜格 I (šače) が用いられるはずである。

14) yezi tow zav winetu 「君は昨日子供たちを見ていた」(過去完了形)

15) yezi sak zav winetu 「私たちは昨日子供たちを見ていた」(過去完了形)

[yezi 「昨日」 tow 「君」 obl-1 sak 「私たち」 obl-1 zav: za 「子供」 pl obl-2 winetu : win- 「見る」 完了語幹]

上の例における動作主には語尾つきの形(towe / sake) が用いられるべきである。

これらの-e 語尾が脱落した形は、正しい能格構文とは認識されていないものの、非文とはならない。

4.1.2. 斜格 II への語尾-e の付加

さらに、上で示した斜格 I における語尾の脱落ほど頻繁ではないが、他動詞の過去における被動作主を表す斜格 II には、反対に、本来不要な語尾-e (または弱い/a/) が付加される場合がある。

- 16) *yezi maže storve / storev / storv* wind 「私は昨日星（複数）見た」
storve/storev/storv のいずれの形を用いても非文にはならない。
- 17) *yem šače sak / sake qap dišt* 「このイヌは私たちを咬んだ」
 [yem 「この」 šače: šač 「イヌ」 obl-1 sak/sake 「私たち」 obl-2 qap dišt: qap din- 「咬む」 過去語幹]
- 18) *maže yowe ra bozor yut* 「私は彼女をバーザールに連れて行った」
 [maže 「私」 obl-1 yowe: 「彼女」 obl-2 ra 「〜へ」¹⁷⁾ bozor 「バーザール」 yut: yund- 「連れて行く」 過去語幹]

本来は無語尾の斜格 II に *-e* が付加される形が正しいが、無語尾形／語尾つき変異形のいずれを用いても非文とは認識されない。

4.1.3. 斜格 I/II 変異形の出現条件

このように、斜格 I および II は、規範文法レベルではなお独立した格として認識されているものの、実際の発話においては、*-e* 語尾が不安定になり、結果として斜格 I/II の区別が希薄になっているようにも見受けられる。

付け加えておこなれば、母音脱落は、斜格に限らず、ワヒー語では顕著に認められる現象である。特に若い世代に認められる傾向として、無強勢音節で母音が脱落し、子音連続が生じる例が多数認められる。母音の脱落は/a/に生じる場合が多いが、無強勢音節中の/e/についても、弱化して[ə]となったり脱落することがある (cf. 注9))。このような母音の不安定性は、Lorimer(1958), Kamensky(1988)らも取り扱いにかなり苦慮している問題でもある。また[ə]を音素として扱うか、異音とするかについても、研究者の間で解釈が異なり、現在でも統一した見解には至っていない。このような状況を考慮すると、強勢をとらない斜格語尾*-e*の出入り（特に脱落）は、格の認識に関わるレベルのものではなく、単にワヒー語の音声特徴を反映した可能性があることも指摘しておく必要がある。

これら2つの変異形は、文中で無制限に本来の形と交替できるわけではなく、その出現に制約がある。例えば、これらの変異形は、動作主および被動作主のどちらか一方に対して現れることはできるが、両方の変異形を用いた場合には斜格 I/II が逆転することになるので、非文と判断される。また、これらの変異形に対しては、伝達内容が動作の方向に曖昧さが生じない場合には、許容度が高くなる傾向がある。

ここで「キツネがイヌを咬んだ」という文について見てみる。本来の斜格 I/II およびそれぞれの変異形を組み合わせると、4通りの可能性がある。

- 19) *naxčire šač qap dišt*

- 20) *naxčir šač qap dišt*
 21) *naxčire šače qap dišt*
 22) *naxčir šače qap dišt*

[*naxčir* 「キツネ」 *šač* 「イヌ」 *qap dišt* 「咬む」 過去語幹]

19)は本来の基本的な能格構文(A=*naxčire*=斜格 I, P=*šač*=斜格 II)である。20)は A=*naxčire* (斜格 I)の語尾が脱落した変異形を含む例, 21)は P=*šač* の斜格 II が語尾付変異形である形, 22)は動作主・被動作主ともに変異形が用いられた形である。

これらの例は, 下になるほど許容度が下がる。特に両方に変異形が含まれる 22)では, 動作主と被動作主が混乱し, 語順より, *naxčir*=A かと予想はされるが非文に近く認識されており, 聞き返されるか, 他の代名詞(*ex.ya*)などを用いて指示し直す必要がある。

また, 20)のように, 片方の語尾が脱落して双方とも無語尾形が用いられた場合は, 発話内容的な制限がない限り, 最初に来た方が動作主, 後に来た方が被動作主と判断される。

非文となる 22)については, 本来の能格構文からすれば, 格語尾が入れ替わり, *šače* を斜格 I, *naxčir* を斜格 II と捉え, A と P の位置が入れ替わった文としての解釈も可能であるが¹⁸⁾, このような認識はされない。どちらが A/P であるかは, 斜格 I/II の格語尾よりも, A と P の語順が判断基準として優先されている。

発話内容から A と P の関係が明確である場合は, 上記では混乱をきたすとした, 斜格 I/II 変異形の両方の出現が許容される場合もある。例えば, 非文とされた 22)で P を人間に替えるなど(「人間がキツネを咬む」のは不自然, など), 格語尾に依存しなくても動作が及ぶ方向が判断できるような場合では, これらの変異形が許容される度合いが高くなる。例えば,

- 23) *yezi maže storev wind* 「昨日私は星々を見た」

[*maže obl-1 storev: stor* 「星 (複数)」 *obl-2 wind* 「見る」 過去語幹]

という文に対して, 論理主語および目的語の双方に変異形が用いられた形,

- 24) *yezi maž storve wind*

は, A と P の関係に曖昧さが生じないため, 非文とは判断されない。

4.2. Moving Particles の影響

4.2.1. Moving Particles

ゴジャール・ワヒー語の能格構文上の「ゆれ」に関連する要素として, パミール諸語に代表的な文法事象の一つ, Moving Particles は重要な位置を占めるといってよい。Moving Particles は現在時制/過去時制の両方で用いられるが, 他動詞文の過去時制では, 3.で示した能格構文の A(=斜格 I)が省略された場合に, これに代わって A を標示する。

Moving Particles はその名称のとおり，接続する要素が決まっていないことが特徴である。同じくパミール諸語に属する Shughni 語，Roshan 語などでは，文の最初の主要要素に接続するとされる¹⁹⁾。

Moving Particles は人称・数によって変化し，ゴジャール・ワヒー語では以下の6形がある。

	単数	複数
1	-em ²⁰⁾	-en
2	-et ²¹⁾	-ev
3	-i / -	-ev / -uv

起源的には，Moving Particles は，本来のイラン系言語の人称代名詞接尾辞形を継承する。イラン系言語の人称代名詞には，伝統的に，独立形および接尾辞形が存在し，接尾辞形は古代イラン語期では格変化も有していたほか，すでに格の別が失われた現代ペルシア語などにおいても，属格，与格，対格的な機能を果たすなど，多彩な用法がみられる²²⁾。一方で，ワヒー語の Moving Particles は，接続する要素の自由度は高いが，それが標示するのは論理主語に限定される。

以下に Moving Particles の用法の代表例をあげる。

4.2.2. Moving Particles の用法

①現在時制におけるコピュラの機能

現在時制では，Moving Particles は主語に接続してコピュラのように機能する。主語が省略されない場合には，主に最初の主要要素に接続する。

以下，グロス中では Moving Particles は MovPt と略する。

25) tut kumd jayen? 「君はどこから来たの（どこの出身）」

[tut: tu 「君」 +t MovPt2sg 短縮形 kumd 「どこの」 jayen : jay 「場所」単数奪格]

26) kum jay(e)net? (同上)

この例では，主語 tu 「君」が省略され，MovPt が jayen に移動して接続している。

27) wuzem yafč wašk 「私はとても疲れた」

[wuzem: wuz 「私」 -em MovPt 1sg yafč 「とても」 wašk 「疲れた」]

28) yafčim wašk / waškem

上記 27)の主語／主語と副詞が省略された形。この場合，Moving Particles はこのように副詞や形容詞にも接続することができる。

②過去時制における動作の主体の標示

過去時制 (および完了形) における能格構文中では、斜格 I (=A) が省略される場合に出現し、動作主をあらわす。

- 29) riŷeði kot ŷe karti ta kiltunj 「彼 (怪物) は爪を切つて門にさした」

[riŷeði: riŷeð 「爪」 obl-2 + -i MovPt 3sg kot: kun - 「切る」 過去語幹 ŷe 「そして」 karti: kart (kat:- 「置く」 過去語幹) + -i MovPt 3sg ta 「〜へ」 上方の場所を表す前置詞 kiltunj 「門」]

- 30) dzrengv maž ðetk 「こんな風に (彼らは) 私を差し出した」

[dzrengv: dzereng 「このように」 + -ev MovPt 3sg maž 「私」 obl-2 ðetk: rand- 「与える」 完了語幹 (現在完了形)]

- 31) čilbobuk tiwetk, a yow ŷetk pandz zman. yi ror tayin ŷetki naxčiri wezg.

「(昔々) ヤツガシラがいました。(ヤツガシラには) 5羽のヒナがいました。ある日、(ヤツガシラは) キツネがやって来たのを見ました」

[čilbobuk 「ヤツガシラ」 tiwetk: 完了語幹 a: 強調の接頭辞 yow 「彼, 彼女」 3sg obl-2 (無語尾形) ŷetk: go- 「作る」 完了語幹 pandz 「5」 zman 「子供」 obl-2 yi ror 「ある日」 tayin ŷetki: tayin tsar- 「見る」 過去語幹 + -i MovPt 3sg naxčir 「キツネ」 + -i MovPt 3sg wezg: wez- 「来る」 完了語幹 (現在完了形)]

上の例では、第 1 文の yow (=A) が第 2 文で省略され、Moving Particles と交替している。特に民話などの語りにおいては、斜格 I による動作主をトピック提示した後は、これを省略し Moving Particles によって表すのが普通である。

4.2.3. 能格構文への影響

斜格 I に立つ論理主語と Moving Particles の出現は相補的であり²³⁾、Moving Particles が現れる場合には、斜格 I に立つ動作主は隠れてしまう。また、Moving Particles は、接続する要素に制限がないため、単語の重複が避けられる会話文中などでは、副詞や目的語が省略され、最終的には動詞語幹に接続する短縮形が用いられるようになる。

- 32) yezi maže kerk patst 「私は昨日鶏を料理した」

[maže: 人称代名詞 1sg obl-1 kerk 「鶏」 主格 patst: patst- 「料理する」 過去語幹]

この文は、A を省略し、以下のように Moving Particles を用いて表すこともできる。

- 33) yezim kerk patst

[yezim: yezi 「昨日」 -m: MovPt 1 sg (省略形)]

さらに、副詞、目的語を省略した場合は、Moving Particles は移動して次の要素に接続し、以下のような短縮形を作る。

- 34) kerkem patst

35) patstem

36) towe šapik yita? 「君は食事をしましたか」

yan, yitem 「はい、(私は) 食べました」

[towe: 「君」 obl-1 šapik 「食事」 obl-2 yita: yau- 「食べる」 過去語幹+ -a (疑問を表す接尾辞) yitem: yit(過去語幹) + -em MovPt 1sg]

35), 36)のような過去語幹+Moving Particles の形まで短縮された動詞文では、本来は代名詞である Moving Particles が、被動作主に一致する動詞人称語尾のように働いており、この文は内的には能格構造をとっているにもかかわらず、表面上は主格対格構文における過去形のように見える。このような短縮形では、他動詞の動作主が Moving Particle によってマークされることにより、論理の焦点は、本来能格構文でおかれるべき被動作主から動作主へ転換している。この点でこの短縮形においては、能格性は限りなく希薄になり、主格-対格型に準ずる形を成しているといつてよい。

この短縮形において、4.1.2 で指摘した斜格 II のバリエーション (語尾付加形) が用いられた場合はさらに厄介である。上記 33)で斜格 II 変異形と Moving Particles が用いられた形は、次のようになる。

37) yezi-m kerke patst

[yezi 「昨日」 -m MovPt 1sg kerke obl-2 語尾付加形 patst 過去語幹]

ここでは、語尾形である斜格 I が現在時制で対格として機能する影響もあり、さらに主格構文的な色合いが強くなる。この種の短縮形では、すでに Moving Particles によって動作主が明示されているため動作の主体に曖昧性が生じることはなく、情報伝達上は障害がない。このような短縮形では、斜格の格語尾は余剰な要素となっている。

ゴジャール・ワヒー語では、このような Moving Particles を用いた短縮形は、実際には、斜格を用いた完全文よりも頻繁に使われている。このような「疑似」主格-対格型他動詞文の使用は、4.1.で指摘した斜格の混乱と共に、能格性のゆれをさらに拡大する要因の一つとなっている。

結びにかえて

以上、ゴジャール・ワヒー語における能格構文の体系と、使用実態にみられる能格性のゆれについて概観してきた。繰り返しになるが、ゴジャール・ワヒー語が、3項対立のタイプをどのような経緯でとるようになったのかについては、書記テキストをもたないため解明するのは困難を極める。現段階で指摘できることは、①ゴジャール・ワヒーの格標示体系は言語の経済性からみても極めて非効率であり、その複雑な体系ゆえに、格標示構造が混乱し、これと同時

に格標示構造に依存しない *Moving Particles* の優先度が高まることで、実際の使用面で能格構文にゆらぎが生じているという現状と、②もう一方の下位言語であるタジク・ワヒー語ではすでに能格構文が失われているという事実のみである。

ワヒー語が、その格組織において、他のパミール系言語に比べて革新的であるということは、すでに述べた。ゴジャール・ワヒー語の能格構文がどのような変化の流れに向かっているのかについては、今後もさらに観察を行って見きわめていく必要がある。しかし、現在の状況がさらに進んで、斜格 I と斜格 II の曖昧性が増し、格の別が希薄になることと同時に、*Moving Particles* による疑似的主格—対格構文による論理主語の表示が優勢になり、過去時制でも動作主に論理上の焦点があたるのが優勢になったとき、統合した斜格が現在時制のみならず過去時制においても対格的に働くようになり、結果的に、ゴジャール・ワヒー語の分裂能格が、タジク・ワヒー語が辿ったように、斜格起源の 1 人称単数に能格性の名残りを残しながら、次第に主格対格構文へと移行していく可能性を、十分予測できるのである。

注

- 1) 本稿は、平成 19 年度文部科学省科学研究費「ゴジャール・ワヒー語圏の調査研究—文法分析・比較基礎語彙と民俗誌資料の採集・分析」(課題番号 19401018) による調査研究成果の一部である。
- 2) パミール諸語にはさまざまな下位言語があり、大きく Roshani-Shughni グループ (Roshani, Batrangi, Oroshori, Shughni, Sarykoli), Jazgulami, Ishkashmi, Wakhi の 4 グループに大別される (Payne 1989)。
- 3) パミール諸語の最東端に位置するワヒー語は、パミール高原部およびヒンドゥークシュ山脈周辺部に分布し、その通用域はアフガニスタン (ワハン回廊)、タジキスタン共和国、中国新疆ウイグル自治区、パキスタン北部地域の 4 ヶ国に及ぶ。ワヒー語とパミール諸語の他言語グループや関連性が指摘されている Munji 語 (アフガニスタンに分布) との関係についてはまだ不明な部分が多い。本稿で扱うゴジャール・ワヒー語は、パキスタン側ゴジャール地域 (上部フンザ地方) に分布する、ワヒー語の下位方言である。同じく下位方言であるタジキスタン側ワヒー語 (タジク・ワヒー語) に関しては Grünberg & Steblin-Kamensky (1976, 1988) らによって一定の研究がされているが、ゴジャール・ワヒー語については、1930 年代に調査を行った Lorimer (1958) による報告などがあるものの、なお研究途上の段階で、文法体系が解明されるには至っていない。ゴジャール・ワヒー語の話者人口等の詳細については吉枝 (2008)、ゴジャール・ワヒー語の音素体系については Yoshie (2005a) を参照されたい。
- 4) Lorimer (1958: 60) では、斜格 I は Transitive Nominative、斜格 II は Accusative とされる。
- 5) ワヒー語の人称代名詞/指示代名詞は、I (近称) yem, II (中称) yet, III (遠称) yow より成り、単複と格の区別がある。近・中・遠の区別は単に話し手と聞き手の空間的距離だけでなく、情報の既知・未知に関わることが確認されている。またこれに加えて、特に定の事物を表す代名詞 ya があることも確認しているが、機能および格変化については未解明である。
- 6) 吉枝 (2008) では、これらの格が形の上では 2 パターンを示しながら、機能の面では現在時制における対格、過去時制における A および P を示す格をそれぞれ独立した格として扱い、「対格」「能格」「他動詞目的格」とした。
- 7) 中期ペルシア語の人称代名詞直 1 人称単数形は、後期のパフラヴィー語文献では直格/斜格の両方に man が用いられるようになった。
- 8) 斜格 I/II は、タジク側ワヒー語における対格 (定) と対格 (不定) に、それぞれ対応する (Kamensky 1988: 26, 29)。
- 9) -em / -et / -en には、母音が弱化した形 -am / -at / -an も認められる。また、-o# に語尾が接続する場合には、

わたり音-wが挿入されることがある。

- 10) Grünberg & Kamensky(1980)と、主として Kamensky の報告に依る Payne(1989:437)では、現在動詞人称語尾の2人称複数形は-ev とされている。これは、後述の Moving Particles の2人称複数形-ev の影響によるものと考えられる。フンザ地方(北部パキスタン)で調査を行った Lorimer(1958)による報告では、この人称語尾は-et とされており、Morgenstierne(1938:505n)では主流は-ev,フンザ出身のインフォーマントからのみ-it,-av の両方が認められ、西ワヒー語では-ev, 東ワヒー語では-it であると指摘されている。本調査では、確認された動詞人称語尾は-it のみで、-ev は認められなかった。Payne(1989)によると、他のパミール諸語では語尾に-t 形と-f/v 形の両方をもつ言語もある。特に、パミール諸語の中で最もゴジャール・ワヒー語に近く、中国新疆ウイグル自治区に位置するサリコーリー語については、-it のみが指摘されている。
- 11) -aw/-ew/-e で終わる現在語幹に接続する。
- 12) ゴジャール・ワヒー語の動詞体系については、Morgenstierne(1938), Lorimer(1958)による研究がある。このうち、Morgenstierne による分析では、過去時制についてはデータが不十分なこともあり、能格構文に対する言及はない。また、Lorimer(1958)では、斜格 I を他動詞主格、斜格 II を対格とし、主格対格構文として分析を行っている。ただし、Lorimer のこの解釈は、彼自身が言語学者でないこともあり、能格構文の可能性を否定したうえで分析結果とは考え難い。例えば、maže bet hof 「私は外套を織った」のような例文(Lorimer 1958:176)では、bet 「外套」自身が対格とする-e 語尾をとまわらない形が現れているにもかかわらず、この現象に対する説明はなされていない。このような例は本書中に多数認められる。
- 13) ワヒー語では、人称代名詞3人称単数形は、「彼/彼女」の両方に用いられる。
- 14) ワヒー語は本来 SOV 言語であるが、民話等の語りにおいては、このように、V と O が入れ替わることが頻繁にある。
- 15) ただし、代名詞1人称複数形、3人称単数形、普通名詞では、主格と斜格 II は同一の形となる。
- 16) 現地調査で民話テキストを記述した際には、録音による音声だけではインフォーマントが動作主と被動作主の関係を把握できず、語り手に後日聞き直す場面が、かなりの回数でみられた。
- 17) ゴジャール・ワヒー語では、場所・方向を表す前置詞に ta, ra, ska, da などがあり、動作の方向や話し手と聞き手との位置の上下関係(上方、下方、真上)などによって使い分けがおこなわれる。これらの前置詞の用法には、場所や動作の上下関係だけでなく、可視性や話し手との物的・心的距離など、多様な要素が働いている。詳細については稿を改めて述べることにする。
- 18) Lorimer(1958)では、少数ながら、他動詞の A と P の語順が入れ替わった例も認められる。
- 19) Payne(1989:438). これに比べて、ワヒー語では移動が比較的自由であるが、この Moving Particles の移動の自由度に関しては稿を改めて述べることにする。
- 20) 動詞人称語尾と同様、母音が弱化した形-am, また、特に人称代名詞 wuz に接続する場合、母音調和した形-um も認められる。母音で終わる単語に接続する場合には-e が脱落することがある。
- 21) 2人称単数形および語末子音が母音である名詞に MovPt が接続する場合は w が挿入される。
- 22) 古代ペルシア語では、接尾辞形人称代名詞の例をあげておく：
auramazdā-maiy ima xšaçaṃ farābara 「アフラマズダは私にこの国を授けた」
[auramazdā 「アフラマズダ」-mai 人称代名詞接尾辞形 1sg 与格(「アフラマズダが私に」)](ダレイオス王ビーソトゥーン碑文 1.24)
uta-šim gādavā nišādayam (私はその国々を討ち, 「そして私はそれを正しい位置に戻した」[utā 「そして」-šim 人称代名詞接尾辞形 3sg 対格「それを」](クセルクセス王ダイワ碑文 34)
現代ペルシア語では、接尾辞形人称代名詞は格変化せず、属格として用いられることが最も多いが、動詞と接続した場合には目的語を表すこともある。
pedar-am be man in 'arusak rā dād 「私の父親は私にこの人形をくれた」
[pedar-am:pedar 「父親」-am 接尾辞形人称代名詞 1sg be 「~に」 man 人称代名詞(独立形) 1sg in: 「この」'arusak 「人形」 rā 「~を」(後置詞) dād:dah- 「与える」 3sg past]
gorosname [-gorosne-am-ast : gorosne 「形容詞」-am 接尾辞形人称代名詞 1sg ast : budan (コピュラ) 3sg]
nadidam-eš 「私は彼を見ていない」[nadidam:bin- 「見る」 1sg past +-eš 接尾辞形人称代名詞 3sg (= 「彼」)

fardā nešān-et midaham 「(私は) 明日あなたに見せましょう」

[fardā 「明日」 nešān-et midaham: 複合動詞 nešān dādan 「見せる, 示す」 1 人称単数現在形, 非動詞成分 nešān に-et 接尾辞形人称代名詞 2sg が接続した形]

- 23) Lorimer(1958:176)では, 他動詞の過去形について, 1)他動詞主格+過去語幹, 2)Moving Particles+過去語幹, 3)他動詞主格+Moving Particles+過去語幹の形にも言及しているが, これまで得られたデータでは, 3)の例は確認されていない。

参考文献

- Backstrom, Peter C. 1992. "Wakhi" and "Appendix D Wakhi Survey Data" in Backstrom, Peter C. & Carla F. Radloff, *Sociolinguistic Survey of Northern Pakistan 2. Languages of Northern Areas*, National Institute of Pakistan Studies, Quaid-e-Azam University/Summer Institute of Linguistics, Islamabad, pp.57-74 and pp.273-92.
- Cardona, G. 1970. "The Indo-Iranian Construction *mana (mama) kṛtam*" *Language* 46, pp.1-12.
- Comrie, B. 1981, 1989. *Language Universals and Linguistic Typology: Syntax and Morphology*. Blackwell, 『言語普遍性と言語類型論』(松本克己・山本秀樹訳) ひつじ書房 1992 年.
- Dixon, R.M.W. 1994. *Ergativity*. Cambridge University Press.
- Garrett, A. 1990. "The Origin of NP Split Ergativity" *Language* 66/2, pp. 261-95.
- Grünberg, A.L. & I.M. Steblin-Kamensky. 1988. *La langue Wakhi, Essai grammatical et dictionnaire wakhi-français*, édité et traduit par Dominique Indjoudjian, suivi de *Dictionnaire français-wakhi* établi par Larissa Kydyrbaiéva, Maison des Sciences de l'Homme, Paris [original Russian edition 1976]
- Kent, R.G. 1953. *Old Persian*. American Oriental Society, New Haven.
- Klimov, G.A. 1979. "On the Position of the Ergative Type in Typological Classification." in F.Plank (ed.) *Ergativity: Towards a Theory of Grammatical Relations*. Academic Press, London, New York. pp.327-32.
- Lorimer, D.L.R. 1958. *The Wakhi Language*, I. *Introduction, Phonetics, Grammar and Texts*, II. *Vocabulary and Index*, School of Oriental and African Studies, University of London.
(私家版; 本書は SOAS の Nicholas Sims-Williams 教授より, 2005 年 6 月に恵与されたものである。同教授のご厚意に感謝する)
- Morgenstierne, Georg. 1938. "Wakhi" in Morgenstierne, Georg. *Indo-Iranian Frontier Languages*, Second Edition, *Revised and with New Material*, vol. 2 *Iranian Pamir Languages -- Yidgha-Munji, Sanglechi-Ishkashmi and Wakhi*, Institute for Sammenlignende Kulturforskning, Universitetsforlaget, Oslo/Bergen/Tromsøe.
- Noda, Keigou 1983. "Ergativity in Middle Persian" *Gengo Kenkyū* 84, pp.105-25.
- Pahalina, T.N. 1975. *Vahanski jazyk*, Moskva .
- Payne, John 1980. "The Decay of Ergativity in Pamir Languages", *Lingua* 51, pp.147-86.
—— 1989. "Pamir Languages", in Rüdiger Schmitt (ed.) *Compendium Linguarum Iranicarum*, Wiesbaden 1989, pp.417-44.
- Reinhold, Beate 2006. *Neue Entwicklungen in der Wakhi-Sprache von Gojal (Nordpakistan)*, Harrasowitz Verlag, Wiesbaden.
- Schmidt, K.H. "Reconstructing Active and Ergative Stages of Pre Indo-European" in F. Plank (ed.), *Ergativity: Towards a Theory of Grammatical Relations*. Academic Press, London, New York. pp.332-45.
- Skjærvø, P.O. 1985. "Remarks on the Old Persian Verbal System" *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 45, 211-27.
- Trask, R.L. 1979. "On the Origins of Ergativity" in F. Plank (ed.), *Ergativity: Towards a Theory of Grammatical Relations*. Academic Press, London, New York. pp.385-404.
- Yoshie, Satoko 2005a "The Sound System of Gojal Wakhi", 『東京外国語大学論集』71, 東京外国語大学, pp.43-82.
—— 2005b "Gojal Wakhi Basic Vocabulary" 『言語情報学研究報告』No.8., 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」東京外国語大学, pp.401-77.
- 吉枝聡子 2007 「ワヒー語婚礼歌 Sinisay」『東京外国語大学語学研究所論集』東京外国語大学語学研究所, pp.101-18.
—— 2008 「ゴジャーレ・ワヒー語の動詞体系」『東京外国語大学論集』76, 東京外国語大学, pp.35-62.
(ワヒー語基礎語彙ウェブサイト: http://www.coelangtufs.ac.jp/multilingual_corpus/wakhi/)

The Ergativity in Gojal Wakhi

YOSHIE Satoko

The Pamir languages, like other eastern Iranian languages, originally has the split ergative construction, historically derived from the Middle Iranian, which shows a nominative–accusative construction in present tense and an ergative one in past tenses. Nowadays, however, it exhibits 'various stages in the decay of the original ergative construction into a nominative-accusative one' (Payne 1980). For example, Roshani has 'double oblique' system in its ergative construction in past tenses, while Tajik Wakhi which is one of sub-dialects of Wakhi has shifted its ergative-absolutive construction into nominative-accusative one except oblique-subject construction only found in first and second personal pronouns in lower dialect.

Gojal Wakhi, on the other hand, preserves more conservative pattern compared to Tajik Wakhi. It still maintains ergativity in past tenses formed by two types of oblique case, namely, (1) -e suffixed 'oblique 1' which functions as both accusative in present tense and transitive nominative in past tenses, and (2) suffixless 'oblique 2' which marks the patient (P) of transitive verbs in past tenses. In distinction to these two oblique forms, nominative which marks the intransitive subject (S) in all tenses and the agent (A) of transitive verbs in present tense also exists. In past tenses (i.e. simple past, perfect and pluperfect), on the other hand, A and P is indicated by the oblique 1 and the oblique 2 respectively. There is no verb agreement with either A or P and bare past stems or perfect stems are used.

According to the classification of case-making system by Dixon (1994), this 'tripartite' or 'semi-double oblique' type observed in Gojal Wakhi is quite rare. It can be analyzed as a developed stage of the double oblique system (A=P=identical oblique, S=absolutive type) found in Roshani, which is also suggested to be one of the stages in the development of an ergative-absolute system into a nominative-accusative one.

At the present moment, distinction between the oblique 1 and the oblique 2 is still stable in the 'prescriptive' level among Gojal Wakhi speakers. However, once we look into narratives or dialogues, we can find a great diversity (or instability) in their ergative construction: 1) loss of -e ending in the oblique 1, 2) suffixation of redundant -e to the oblique 2, and 3) frequent use of short forms with 'moving particles'.